

ポスト・モダン思想家としての谷川雁
戦闘的共同体とセクシュアリティ

大嶽 秀夫

はじめに

安保闘争前後の数年間にわたって谷川雁が指導した九州における労働者の文芸活動たる「サークル村」運動と大正炭鉱の争議とは、社共とは別系列に属する「独立左翼」ではあっても、新左翼運動と呼ぶことには異論もありえよう。その担い手からいって新中間層のラディカリズムという範疇には入らない。また、そうした狭義の新左翼の思想と運動に触発されて生まれた労働者（例えば三菱長崎造船の組合反主流派組織 [三菱長崎造船社研・1970]）のラディカリズムを広義の新左翼の範疇に含めたとしても、その枠からみ出す要素を濃厚にもつ。しかし、谷川の思想は、反スターリニズム、反社民、さらに反市民主義であり、他方より積極的には直接民主主義を掲げるものであった。その点では日本の新左翼の代表というべき共産主義者同盟（ブント）の思想と同一である。さらに谷川の詩（「革命詩」）と思想と運動とが放ったロマンチズムとラディカリズムとは、60年代日本の急進的な学生運動に強烈な衝撃を与えた。吉本隆明、埴谷雄高とともに、「安保の時代」を代表するカリスマ性を備えた思想家であったと言ってよい。後の全共闘との共通性としては、彼の毛沢東への傾斜が挙げられるし、全共闘のスローガン（あるいは流行語）の一つ、「連帯を求めて孤立を恐れず」は谷川という言葉である**1。

加えて、谷川らの運動がポストモダンの思想と運動とを先取りしたような特徴を備えていたことも見逃せない。彼の「辺地の農漁民、流浪のプロレタリアート、特殊部落民、癩病、在日朝鮮人・・・これら差別という形で疎外を受けている者たち」への関心はそれを象徴する*

2。さらに、谷川の『サークル村』（後述）を母体として生まれた『無名通信』という女性交流誌は、1970年代のリブ運動によって再発見され、そのポストモダンの先駆ともいうべき主張は70年代の運動に強烈なイムパクトを与えた [天野・1997・117]。（さらに付け加えるとすれば、この『無名通信』の書き手の一人石牟礼道子が、水俣を主題にした諸作品を生み出すことになる。ただ、石牟礼の仕事をどう評価するかは、別の機会に譲りたい。）

*1*この表現は「工作者の死体に萌えるもの」『文学』1958・6月号にみられる。

2「日本の二重構造」（『戦闘への招待』への書き下ろし）。

*日本の政治運動や芸術運動においては、東京という「中心」に対して、それ以外のすべての地は「周辺」（「地方」）である。逆に言えば、「東京へ行くな」という彼の主張は、東京以外の地にとどまればそれだけで「周辺」の地位を獲得できるという日本の文化の特異性を表現するものである。この点はパリと「地方 province」との関係に似ている。ちなみに谷川には、東京の知識人を痛烈に皮肉った「東京の進歩的知識人」『群像』1956・12月号という一文がある。1960年代中期に京都の大学を卒業して東京の大学院に進み、そこで出会った「東京の知識人の卵たち」に筆者（大嶽）が感じた感想そのものである。

この関連で、アルジェリアの貧民街に生まれ育ったアルベール・カミュと共通する心情と発想をもっていたことが注目される [Todd, 1996]。以下で繰り返し述べるように、思想の上でもカミュとの共通性は多い。

なお当時、地方都市を拠点として運動を切り開いていこうとしていた思想家の一人に、同志社大学教授の鶴見俊輔がいた。

大正炭鉱の争議の際、谷川がオルグの対象とした坑夫たちもまた、元はと言えば村を追われた農民であり、今は貧苦のどん底にあり、「周辺」の系列に位置づけられている。そして、この周辺に残存する共同体に賭ける姿勢も、後述するようにある種コミュニタリアンの原型をなす。それがまた70年代以降の日本で開花する（毛沢東思想やその他の政治的関心とは一線を画した）アジア的文化への「エスニックな」関心にも再現されることとなる。他方、理性より「感性」を重視し、民衆の中の「無私の微笑」として現れる「エロス」**3、坑夫における「男性性」（masculinity）への強迫観念（ポストモダンの言葉で言えば「セクシュアリティ」）の問題などを、谷川やそのパートナーたる森崎和江らは考察の対象としている*。この感性は、ブントの（経済）「理論」がもつ理屈っぽい分析とは異質なものである。ここでも、新左翼を乗り越えてポストモダンの先駆的存在とすら言い得る。この二つの点で、「新左翼からポストモダンへ」という文脈で日本の新左翼の遺産を検討する際には、谷川の思想と運動との検討は欠かせない。

3 「農村と詩」『講座現代詩』飯塚書店・1957。

* 森崎は日帝時代の朝鮮で生まれ17歳までそこで育っており、差別について特別の関心を抱いていた。（というより、朝鮮文化になじんできた自分が日本文化の「肌触り」を理解しえないことに焦燥感を抱いていた [森崎・1965・95, 加納・2003] . ）

他方、谷川は独自の観点から今でいうセクチュアリティの問題に強い関心を抱いていた。例えば、坑夫のもつ「男性性」へのこだわりについて次のように書いている。

坑夫たちの間では「坑内労働への恐怖が公然と語られる」ことはない。「あたりをはばかりの心理の屈折のなかで、坑夫の勇ましさが育ってしまう。仕事がひどいとはいっても、こわいとはいわない。そこに一種の弱さがある。おそらくこの文章を読んだわが坑夫同志諸君は牙をむいて食ってかかるであろうが」**4. 彼の女性性への認識については後述する。

谷川雁の経歴

まず、経歴をみよう**5. 本名は谷川巖（いわお）。1923（大正12）年12月、熊本県水俣で眼科医の次男として生まれた。幼年時代、西南戦争に加わり武士気質を失わなかった祖父（太平洋戦争中は右翼団体に所属）から強い影響を受け、賊軍や叛乱者（そして敗残者として体制の疎外者となった者たち）、一言でいって反権力者に関心と共感とをもった。

熊本中学でも「さむらい気質」の教師たちから影響を受けた。五高、東大文学部（社会学科）と進学し「秀才とうたいはやされ」る青少年時代を送ったが、中高校時代からヒトラーや翼賛体制に批判ばかりいうので「建設的でない」と睨まれた。大学時代は「乞食学生」と自嘲するほど貧乏だったようであるが、閲兵行進をさぼってモーリヤック、ヴァレリー、マルクス、フロイド、道元などを乱読した。

1945年1月、21歳のとき、学徒出陣で千葉県の陸軍野戦重砲隊に入隊、8か月の入隊生活を送った。「死のまぎわへとつれていかれ」「生き残った」戦中派である。「当時学生であった私

4 「武勇の国の臆病者を」『文学』1959・6月号。

5 経歴については、主として『仕事』の巻末の「年譜」に依拠した。

はいつも死んだなかまの代理人として、生ける亡霊であろうと努めてきたつもりである」というのが戦後の彼の心情であった**6。職業軍人を軽蔑し（そのため何度も営倉に入れられる）、敗戦を確信し、空しい死を前にして「死んでも言葉は残しておける」「自分の死を自家製の言葉で飾りたい」という切なる気持ちから、詩人となることを志した [松本・1997・37～8, 44, 52, 55]**7。詩作は遅くとも1945年から始めている。しかし彼は同時に、アメリカ軍に対するゲリラ戦が始まることを予想し、この中から「将来の [日本の] 核」が生まれるはずだと予想した。かくて「一夜にして武器を棄てる数百万の軍隊があったという事実は、その後の私を大いに狂わせました」と書くはめとなったのである**8。彼の「革命」は、この「屈辱」**9を晴らす試みであったといってもよい。

敗戦後東大に戻ったが間もなく卒業し、西日本新聞社の整理部記者に就職した。そして同人誌『母音』に加わり、『九州詩人』にも寄稿し始める。彼を同人誌に誘った『九州タイムズ』の安西均は、谷川の詩によって「名状しがたい興奮にかられた」と記している [松本・1997・56に引用]。

1947年、谷川は「不発だった二・一スト後の消極的状況」によって政治活動に自らを投入した**10。そして西日本新聞社の労組書記長に選ばれ、越年資金要求争議を闘った。しかし最後の瞬間に会社側の切り崩しとGHQによる介入で闘争は敗北、谷川は解雇された（もっとも数カ月で復職を許された）。1949年には共産党九州地方委員会に所属、機関紙部長に就任する。50年の分裂では国際派に属した。この時期のことを彼は、中央にいなかったため党内闘争の「舞台裏の消息などに通じてはいない。そのようなものに感謝している」と言いながら**11、「党内闘争の熱風は僕の故郷での活動を完封した」と記している。しかしこの頃結核が悪化

6 『アカハタ』1956・4・3付。

7 ちなみに松本健一は、丸山眞男の「教え子」を自称すると同時に、谷川からも強い影響を受けた「思想家」「評論家」である。

8 「戦中二十歳の手紙」『十代』1987・8月号 [松本・1997・59に引用]。

9 同右・82に引用。

10 「私の中のグアム兵士」『思想の科学』1960・7月号。谷川は戦後、部落解放の運動でも活動したと述べているが、この時期のことではないかと思われる [『無の造型』しおり]。

11 「辺境の眼は疑う」『アカハタ』1957・4。

し、郷里の水俣に戻った。「なじみの薄い故郷。しかしそのほかに自分の故郷とてはなかった。そこへ帰るよりほかなかった」からである。しかし結核がさらに悪化し、水俣にもとどまらず、1951年、「入院費のあてもなしに」阿蘇山麓の村立中央病院に入院、療養生活に入ることを余儀なくされた**12。

この病院で、彼は「民衆」と出会い、その「優しさ」に触れるのである（この体験もカミュに共通する）。郷里に帰る際に世話を焼き見送ってくれた被差別部落民とこの地の貧しい農民（とりわけ入院中の貧農の娘たち）とに共通する「破格の寛容と平静、それは幾世代をくぐりぬけてきた前プロレタリアートの感情であることを僕は理解した」と彼は記している。この「同じ古い優しさ」を後年、一時期同居することになった「脱走した四人の娼婦」の中に再確認し、彼は「何だ、愛とはこんなものだったのか」と心に叫ぶ。「僕に愛の原型を示したのは形而上的観念ではなく、特殊部落民であり、貧農であり、娼婦たちであり、村の法則だった。彼等は一様に指している。何を。共同体（コミュニティ）を。はるかに遠い記憶に沈んでいる村を。原詩（ウル・ポエジイ）を」と書いた**13。

彼は終生、日本のプロレタリアートは、農民性を根強く残している存在とみなしていた。そして後述するようにこの「農民的共同体意識」の再生に自らの活動を賭けたのである。バクーニンなどのアナキストの系譜に属するといつてよい。このことが、日本の「プロレタリアート」が共同体意識を完全に希薄化した高度成長期以後に、彼の思想的破綻を生んだと考えられる。

1958年末、谷川は森崎和江と同棲を始める（当時谷川は35歳）。彼女は、弟の自殺を機に夫と離婚する決意をし、二人の子ども共に、筑豊の谷川のもとにやってきたのである。二人は単なる夫婦であるというより、同志であった。[森崎・1972・59～61]。当時、谷川と森崎との関係は、サルトルとポーワールのそれに擬して、学生たちの間で話題となった。実際、森崎は谷川との生活を『闘いとエロス』の中で、室井賢と契子という名でフィクションの形で赤裸々に描いている**14*。

12 「農村と詩」「講座現代詩」飯塚書店・1957。

13 「農村と詩」「講座現代詩」飯塚書店・1957。

14 同書では、別に谷川と森崎という人物も登場するので、この事実を知らない読者は混乱する。この点を筆者に教えてくれた、森崎の研究者でもある加納実紀代氏に感謝したい。

ここでは別の著書から二人の共同生活のあり方を伺わせる次の一節を引用しておこう。

「結婚生活を解消して、共同の仕事をしはじめた彼とわたしの生活が、数年たって、互の観念をわりがたいほど密着し、二人の資質のほんの一筋の差の部分で、天に噴きあげるほど互の固着性をゆるしがたくなっていたときです。わたしは彼の息づかいによって、日本の呼吸をまたその慣習を知っていくことのうれしさでくらしていました。概念的な認識ではどうにもならない連続感覚のなさを、微細にはいっていくことのできる対話の快感でそだてていました。夜を徹し朝になり子供らの登校のための朝ごはんを二人で作りながら話しつつ、学校へ出かけたあともまだつづけている、などということも、よくありました。そのかわり対立もけわしく、夜を徹しましたが骨を洗いあっていくたのしさはわたしをみたましました」[森崎・1965・126～7]。

「サークル村」運動とその思想

さて、1958年、福岡県中間市に移住し、上野英信、中村きい子、石牟礼道子、そして森崎和江らとともに、雑誌『サークル村』を創刊した。そして前年から、かつて谷川らが共産党のオルグとして出入りしていた炭鉱、国鉄、教組、全通さらには炭坑婦人協議会を周り、会員獲得に努めた[森崎・1970・8]**15。「サークル村」は、筑豊炭田を主たる舞台としていたが、創刊当時総勢二〇〇名以上の加入者があった。その中心メンバーは共産党員であった*。なおこの年、谷川の最初の単行本『原点が存在する』が弘文堂から出版され、全国の新左翼活動家に広く読まれることになった。

15 「サークル村」と大正炭鉱争議については、当時谷川と同棲していた森崎によるこの著書が筆者の知る限り最も詳しい「報告」である。しかし同書にはフィクションの形で書かれている部分が含まれていて、どこまでが事実であるか判然としない。しかし、基本的には本書が事実を記したものと考えて以下で引用した。

*この雑誌は1960年6月一旦休刊する。この休刊は後述するように、「サークル」という文化運動が安保後の状況の中で合理化反対闘争という政治運動に転換したためである。しかしこれを不満とするグループが10月から第二次『サークル村』を復刊した。この第二次「サークル村」は炭鉱に直接関係をもたないグループによって再開されたのであるが、61年秋までという短命に終わった。

ところで、「サークル村」結成以前に既に各地に共産党の活動の一環として「サークル」が広く存在していた。谷川の狙いは、これらの諸「サークル」に新しい理念を吹き込み、再組織、再編成することによって、マンネリに陥っていたこれら既存のサークルを再活性化することにあつた*。「製鉄文学サークルを例にとると、サークルは惰性によってひらかれているが、一種のマスターベーションの繰り返しであり、最初の頃の大膽な意見の交換、創造活動のエネルギーも失われ、最近では『芥川賞』『新人賞』とかの作品批評が中心となり、サークル員の生存の場から離れ、創造活動は停止している」という状況にあつたのである〔森崎・1970・38～9〕。

*「サークル」という運動形態は、日本では1931年、蔵原惟人がソヴィエト・ロシアの例にならって「プロレタリアの前衛的文化運動をになう小集団」として位置づけられたのが最初であるといわれる。敗戦直後には、雨後のたけのこのようにこの種のサークルが誕生したが、1948、49年頃から急速に衰退していった。しかし50年代には、再び平和・反戦運動と連動しながら「勉強会」としての「サークル」運動が再活性化する。この「第二期サークル」は共産党が主導するものが少なくなかった〔天野・1997・81～100〕。谷川らの試みは、こうしたサークルの伝統を引き継ぎながらも、第一期の戦後啓蒙的なサークル、第二期の市民運動的なサークルとは異なる内実を「サークル」運動に与えようとしたものであつたといえよう。

「サークル村」の結成について、谷川は「『サークル村』創刊宣言」の中で「全九州〔および山口〕の数十のサークルに所属するメンバーが一つの雑誌を軸にしてあつまる」「組織加入でなく個人加入の原則」をとると宣言し、改めてサークルの意義を次のように説いている*

16. サークルとは「その発生を民族の伝統のうちに探れば、共同体の下部にあった民衆の連帯感とその組織にあるだろう。・・・今日は資本主義によって破壊された古い共同体の破片が未来の新しい共同組織へ溶けこんでゆく段階であって、そのるつぼであり橋であるものがサークルである。歴史は社会の共同体的契機を階級的契機が圧倒してゆく過程から、その極限状況に達したところで逆転して共同体的契機による階級的契機の克服、止揚という過程をたどりつつある。マルクスによる〔原始〕共同体の議論を敷衍すると、共同体は「戦闘と会議と生産の三種の機能」をそれぞれに担う、三つのタイプに分類できる。今日の状況に即して言えば、「政党、労組などは一種の戦士共同体であり、青年婦人の組織などは会議共同体、協組や文化サークルは生産共同体であるといえよう。そして階級の緊張がうすれてゆくにつれ、これら異種の共同組織の境界もとり去られてゆき、しだいに融解しあってただ一箇のコンミュンとなってゆくであろう」。

* 谷川の民衆イメージには、吉本隆明と同じく二元性がある。「愛と優しさ」と（百姓一揆の伝統に持続された）「戦闘性」とである。もっとも吉本の場合は、一つの極は「愛と優しさ」ではなく、打算的リアリズムとしたたかさであるが。この二元性は、日常と非日常に対応するのだろうか。しかし、谷川の理想とする延安の毛沢東グループでは、生活と革命とが融合している。谷川の言葉でいえば、「戦闘的共同体」とその他二つの共同体とが融合しており、この両者の間に乖離はない。

谷川はここで、創作・「創造」活動を生産活動と捉え、かつその主体を共同体であるサークルとする。一言で言えば集団創作を提唱しているのである。そして逆に創作がまた共同体再生の課題を担うものとしても位置づけられる。この文脈で共産党のサークル活動の一つの柱である「うたごえ」運動を批判して、「作詩作曲運動を抜きにした『うたごえ』の新たな飛躍は考えられない」と主張する。こうした議論は、通常の意味での生産活動が既に共同体再生につながるような共同創造の機能を失っていることを彼が認識していたことを意味する。資本主義的文化が農村に浸透し、農村の作業が個人化しているばかりか、工場労働も経営者の管理の下に置かれたままの現状からそう判断したものと思われる。いずれにせよ共同体再生に向けた「生

16 「さらに深く集団の意味を」『サークル村』創刊号・1958・9月。

産」は、(少なくとも当面は)文化活動でしか行えないと判断していたのである*。そして数人のメンバーによる集団詩作などに取り組むこととなった。

* 1957年にソ連は人類史上初めて人工衛星の打ち上げに成功するが、この成功は「頭脳が集団化されたとき、かくも壮大な結果を生む」とする刺激を「強烈なメッセージ」として与え、それがサークル村結成の一つの契機になったという[河野(信子)・1990・210]。日本共産党への批判や幻滅にもかかわらず、ソ連への期待、憧憬が未だ失われていなかったことの傍証である。

なお、1960年代末に実現する(新左翼の影響を受けた)国労や全通の職場支配は、労働者の生産の場においても、「共同体」の再生が(一時的にはあったが)可能であったことを示している。しかもそれは、敗戦直後の「生産管理」から三井三池の組合による職場支配の伝統を引き継ぐものであった[平井・2000]。谷川はこの伝統を単に知らなかったのであろうか。三池の近くにいた彼が知らなかったとは、考えにくい。

また、谷川による労働者の文化活動への注目は、直接影響を受けたかどうかは不明であるが、イギリスの新左翼、とりわけリチャード・ホガートやレイモンド・ウィリアムズにおける「労働者文化」へのロマンチックな憧憬や、民主主義的参加による「文化」の共同形成の主張と軌を一にしている[Hoggart, 1957; Williams, 1957]。

しかしながら谷川は、ある地域での生産の共同体として農耕作業の(一部)集団化の試み(大分県のある寒村での「人間無尽」)を高く評価し、かつ中国の人民公社をそれに重ね合わせている**17。『サークル村』にはこの「人間無尽」の活動がサークル員自身の執筆により手紙の形で掲載されている。「一人でやれば十日もかかるような仕事、開墾などにしましてもわたしたちの無尽では一日でそれができあがる。・・・七人、八人でやったとしたらどうなるでしょう。わたしたちの口からは『仕事の唄』が『若者よ』が口をついてでてくるんです。女の話に花が咲くんです。町の行政のことが石をこねあげながら議題となるんです」[森崎・19

17 「沈黙の夜を解くもの」『読書新聞』1959・1・1日号。

70・56～7に引用]。ただ、この開墾は農閑期の作業であり、通常の耕作を共同化するには至っていない。それには色々問題があって容易に踏み込めないのが実態であった。にもかかわらず谷川の狙いは、農民の意識を変革して、全面的な生産の共同化に向かうことにあったのである。

この点を谷川は、「世界の映像を裏返さないかぎり、永久に現実を裏返すことはできない。イメージからさきが変われ!・・・よし凡百の唯物論に対立するものであろうとも、民衆にとって変革の正当な順路というものは物質的条件が変わるまで待つことでは断じてない」と書き、さらに「私は・・・感性のコンミュン権力を『現実』より一足さきにうちたてようとしているのだ」と宣言している**18。

谷川にはまた、この運動を前衛党としての共産党の下からの改革につなげようという狙いがあったと思われる。ブントが学生細胞に働きかけたように、既存の共産党系サークルに働きかけ、横の連帯を獲得していったのはそのためである。ただ、ブントが最終的には全学連主流派を丸ごと引き連れて別党に向かったのとは違って、谷川はそうした大衆的組織を「篡奪」することは(少なくとも大々的には)できなかった。

ところで「日本のサークルはさげがたく村の講中や四国遍路の同行者たちのふんいき、すなわち前サークルの気分を背景に持っている。・・・大衆の意識がしつこく古い共同体の思考スタイルから変わっていないことは、近代主義者たちのいうようにその形態を破壊して、個人意識を一度通過しなければ発展しないとする立場を擁護するものではない。もちろん、それは半分の真理をもっている。しかし、大衆の共同体的思考の本質は決して単純に家父長制そのものの機械的な反映ではなく、いわば家父長制の表現をとった横の連帯感の潜在という事実にある。」(ここでは谷川が、伝統的な共同体へのロマンチックな憧れとその再生を説いているのではなく、近代主義者による共同体批判に「半分の真理」を認めて、その変革をも主張していることに注意しておきたい。彼の議論でしばしばマルクスが引用されていることは、その一表現である。)

別の論考で谷川は、同じ趣旨の議論を次のように表現している。「すくなくとも感性の領域で共同体の破片と記憶は農民はむろんのこと大部分の労働者にも今なおいきている・・・日本文明の一番下の階段に生きている・・・この破片と記憶をめざめさせて新しい共同体の基礎

18 「幻影の革命政府について」九州大学『展望』1958・6月号。

にしなければならない」**19. 鶴見俊輔が「危ない橋渡りだな」と評したのは当然である。谷川は「危険のない変革など私は考えたこともない」と応酬している**20.

さらに谷川は、サークル活動が果たした意義について、政治的前衛が同志的連帯感の創成に失敗しかけたとき、サークルがその失われた側面を補修したと述べ、さらに「けれどもこの事実にはさらに大きな意義がふくまれていると考えられる」として次のように議論を展開している。

「従来、階級連帯に関する連帯の説得はおおよそ利害の一致[階級的利益]という点に集中されてきた。・・・[しかし]大衆が選んだのは利益でもなければ正義でもなく、連帯の快楽であった」「それは体制から疎外された大衆の財産であり、大衆はその感覚の伝統を下級共同体の底辺に維持しつづけてきたのである。したがってここにはじめて日本の大衆は階級的連帯意識をわがものとする自然な発条をみいだした。このことの意義はどれほど高く評価しても評価しすぎることはない。日本の思想はようやくにして主体性という言葉にすらつきまどってきたバタ臭さをさほど気にしなくてもすむ通路を切りひらいたのである」**21.

にもかかわらず谷川は、サークルの具体的課題という議論になると、次のような「バタ臭い」言葉でそれを表現している。「サークルの当面しているイデオロギー的課題は、マルクス以後においてフロイトの提示した下意識と性の連関を生産労働との関連においてとらえ直すこと、サルトルが提示した組織内における個人の実存を意識の存在に対するはたらきかけの過程に位置づけること、さらに日本の共同体の最下辺におかれてきた集団の実存を前衛と大衆の関係位置のなかに編入することなどである」**22.

谷川は、共同体意識には「資本主義的な所有の観念とはいちじるしく相違する形での所有観念」があるとする[1961・214]。これを破棄させることが彼の狙いである。

一見したところでは、谷川のコンミュンは、コミットメントという側面からみれば、ブントなど党派への所属が「決断」という一種の「選択」に基礎をもつのは全く異質なもののように見える。生活から連続的に共同体への帰属が生じており、「選択」の契機を欠いているか

19 「農村と詩」「講座現代詩」飯塚書店・1957.

20 「現代詩の歴史的自覚」『新日本文学』1958・7月号.

21 「政治的前衛とサークル」『文学』1959・10月号.

22 同上.

に見えるからである。それはマイケル・ウォルツァーがいう「エスニックな集団」への帰属をイメージしているかのようである。しかし、谷川はこのコンミュン、共同体を「過去」に基礎づけているのではなく、「未来」に基礎づけている。次のような文章にはそれがよく現れている。「昨年96日のストを戦った佐賀県杵島炭鉱のコーラス団が九州のうたごえに出場して『兎追いしかの山、小鮎釣りしかの川』というあれを歌った。その練習のとき『いったい、ふるさととは何だろう』と話し合ったら、二度夜逃げをし、三度父が変わった労働者などはまだましな方だった。故郷の実感といってもどこが故郷やら、実感やら見当もつかない者が多く、『故郷はこれから作るべきものだ』という結論に落ち着いた。・・・故郷の実在する者よりもさらに強い実在感覚が故郷の欠如という形で与えられているのだ」**23。

この関連で、実は谷川自身、一つには自らの強情で攻撃的な性格や「秀才であり級長であること」から、一つには周囲と較べて恵まれた家庭環境から、「仲間はずれ」にされ、幼年時代以来、近隣共同体ばかりでなく家族からもいわば「追放された」存在であり、その共同体からの「追放」を意識していたことを想起すべきであろう**24。そのことを彼自身明瞭に自覚していた。「おまえはそんなに村ごのみであるほど非農民なのか」と問われれば、「さよう、私は村の中の非農民です。そして村のそとでは農民です」と応える、というのが谷川の姿勢であった**25。それだけに彼にとって共同体は、憧れと期待の対象であり、理想化された「幻想」に他ならなかった。換言すれば、創造されるべき課題であった。そして共同体の関係は、共同体を作ろうとする「連帯」の意思に基礎をおくものであった。こう考えれば、ブントと同質の実存主義的「投企」の契機、すなわち「コミットメント」が認められるとあってよからう。

ところで、サークル村は、九州を舞台に展開された運動であることにも注目したい。谷川自身は彼の住む西南九州を拠点、「根拠地」とした。彼によれば、西南九州は「広大な貧農地帯」であり、紡績女工など「北九州、関西への労働力」の供給源である。すなわち、「日本社会の一陰極」である**26。ここを「根拠地」とするという発想には、いうまでもなく毛沢東の

23 「無を噛みくたく融合へ」『ユリイカ』1958・6月号。

24 谷川の幼年時代の回想録『北がなければ日本は三角』河出書房新社・1995（『仕事』に再録）には、こうした記述が散見する。

25 「工作者の論理」『思想の科学』創刊号。

26 「現代詩における近代主義と農民」『詩学』1959・3月号。

影響が認められる。

革命の根拠地として、延安・井岡山を革命の根拠地とした毛沢東にならって、東京を捨て福岡をも離れて、運動を展開しようとしたのである。「辺境こそ首都である」と主張しながらである**27*。ちなみに谷川は戦時中、大学生の頃、延安への脱出を夢想したという。また谷川には「毛沢東」という詩がある。

* 竹内好は、延安こそが毛沢東の思想が作られた場所だと主張した [1951] が、こうした認識と「延安」を理想化する傾向は当時の日本の知識人に広く共有されていた**28。

ところで、「サークル村」は結成当時、力強いスタートを切り、それまでの「サークル」の限界を突破する糸口をつかんだかように見えた。「今新顔の坑夫らは息をあえがせつつ、[谷川ら] 東大出の男が体を張ってヤマの生活に潜行しようとしていることに対して、何でもって報いるべきかというように興奮していた。それは感動の率直な表現であって、人間並に扱われなかったあれこれが一時に清められたかのごとく谷川雁へいどんでいた。政治意識以前のふれあいである」 [森崎・1970・116]。「こげな炭坑んなかまでなりふりかまわず入ってくるもんはおらんばい。あん人は金持ちの坊ちゃんげなじゃんか、たいしたもんばい。出るとこさへ出りゃ部長ぐらいの金はとりきる人じゃるもんなあ。なんがや、社長ぐらいの腕はあるばい、頭のよかもん。社長？ そりゃちっとなんかも知れんばって、とにかく東大出げなもんな」 [同・107]。そうした熱気の中で「『サークル村』は集会を度々開いた。そして討議が重ねられた。『サークル村』の特質は集団内の一種の熱気であって、それを生み出させつづけたのは、谷川雁の指導力と彼の方針に対する共産党の圧力に対する会員らの結集であった」 [同・64]。

しかし「サークル村」は1960年になると次第にかつての「サークル」同様の停滞に見舞われた。「会費の集まりがおもわしくないこと、原稿が少ないこと、実務担当者の出入りが激しく事務が乱脈をきわめた」といった理由が一方にあった [同・121]。しかしより本質的な問題

27 「毛沢東の詩と中国革命」『現代詩』1958・6月号。

28 その実態については、Selden, 1971 を見よ。

をも抱えていたことを森崎は次のように指摘している。「これは創造活動が目に見えるほどすばやくその成果を生むものでないことに対する会員のだれ[傍点]もある。また相互の意識がからみあいすぎて創造性を弱めていた結果でもある。が同時に安保改定期に至りその阻止運動へのかかわり方の不鮮明さ」が、創造よりも政治活動に傾斜する傾向を生んだためでもある。

その結果、「サークル村」は、「複数のものによる共同創造」という目標をついに実現させることはできなかった。「民衆の思弁の複数性と、複数による共同創造との間には多くの側面から検討されるべき思想的課題がふくまれている。『サークル村』はそれらをも検討するには至らなかった」[同・64～5]。しかも、谷川自身が、大正炭鉱争議の指導に専念せざるをえなくなり、後述するように「サークル村」を芸術創造から政治活動の方向に転換させていったのである*。

* 谷川はこの直前、自らの詩集、国文社版『谷川雁詩集』のあとがきに、「私の中にあった『瞬間の王』は死んだ」「人々は今日[1960年1月6日]かぎり詩人ではなくなったひとりの男を忘れることができる」と記して、詩の絶筆宣言をした[『仕事』471]。谷川の晩年、彼の兄健一は、「どうして雁はああ、ポーズをつくるのがすきなのかねえ」と言ったというが[松本・1997・172]、このあとがきもその典型である。しかし場合によっては「虚勢」ともなるこのポーズこそが、常に厳しい状況に自らを追い込んで生きていった彼を支える男の美学であり、男性性への固執だったのであろう**29。

ところで、谷川は1960年6月、共産党を脱党する。この離党届の発送は谷川にとってすら重大な決意を伴う選択であったようである。彼は「三池と安保の高潮期に、ペンを折るか離党かの二者択一に追い込まれた」と記している[谷川・1961・238]。下からの党改革の可能性という「幻想」もなかなか捨てきれなかったのであろう。さらに新左翼学生運動に対しては、労働者のろの字も知らぬ存在に見えたに違いない(事実そのとおりであった)。いずれにせよ、この逡巡からは、既に遅くとも1957年頃から日本共産党の官僚主義的体質を外部のメディアで批判してきた谷川のような人間にとっても**30、前衛の神話の呪縛は相当なものであったこ

29 ちなみに谷川の兄は柳田国男の研究者である。

30 例えば「民衆の無党派的エネルギー」『日本読書新聞』1957・12・2日号。

とが伺える*。

*しかし、1957年9月18日の『東大新聞』への寄稿では、谷川は「今日・・・組織のあるところにエネルギーは存在せず、エネルギーのあるところに組織が存在していない。・・・エネルギーの側に立ってそれを組織しようとするよりほか手はないではないか」と言い切っている[「組織とエネルギー」]。

しかし一旦離党すると、関根弘、武井昭夫、鶴見俊輔、藤田省三、吉本隆明らとともに、中央・東京を舞台に既成左翼を批判する活発な言論活動を展開していった。さらにほぼ同時期に、大正炭鉱において坑夫たちの反合理化闘争を指導するにいたる。この点については、項を改めて論じたい。

安保と三池の評価

谷川は安保・三池の時期には中心的戦場にはいなかった。安保闘争について言えば、「炭坑では生活意識の基盤をゆるがすことのない政治的な運動へ対する冷淡さ」が支配していた[森崎・1970・112]。それに対し、三池については、九州の坑夫たちはそこに「自分のヤマにならないもの」を見て「自分たちの血液をさしださんばかりにそこに集まっていった」**31。そうした違いはあったが、谷川たちにはどちらも自分たちの闘争とはならなかった。

ここで、谷川が三池闘争の総括を、そしてその関連で安保闘争の総括をどのように行ったかを、安保闘争直後に書かれ、吉本隆明らとの共著として出版された『民主主義の神話』に寄せられた一文、「定型の超克」によって見ておこう（同書は、吉本の「擬制の終焉」をも収録しており、当時の新左翼運動に非常に大きな影響を与えた書物である。）

谷川は、既成左翼の呪縛からの労働者の（少なくとも一時的な）解放を、三池で見たとしている。彼によれば、既成左翼とは疑似市民主義者に他ならず、非暴力方針を守るために労働者のエネルギーを組合の指導部の統制に置こうとする存在に他ならなかった。この疑似市民性と

*31*谷川「私の中のグアム兵士」『思想の科学』1960・7月号。

は、「上向期の資本主義がうみだした精神のレベルでの正統市民であろう」とする脱労働者階級意識のことであり、「矛盾を拡大しつつも、なお一定の好況を維持し」「中間層的なムード」を強調する「資本」によって培養された意識である [谷川・1960・32~3]。ここには、明治体制に順応しようとして、正統国民意識をもとうとした武士、農民たち、あるいは戦後憲法体制に順応しようとして脱ファシズム意識のもとに新国民になろうとした戦後の日本人が重なり合わされているように思われる。

ところが三池では、警察側の申し入れを受けて行った組合側の武装解除直後に起きた久保清刺殺事件を契機として、組合の指令によらない再武装が行われた。それは「土着的エネルギーが奔騰し」「貧農漁民の共和主義と坑夫の無政府主義が結びついた、強烈な体臭をもった世界が形成」された [同・25]。換言すれば「疑似市民的なスタイルをとった戦後の労働運動」の枠を越えたものであった。「この日こそ万を越える大衆が戦後労働運動のワクを乗り越え」「防衛的であるにせよ、かくて三池は戦後はじめて躍りだした労働者の自然発生的な武装闘争となった」 [同・26]。

その武装化は、熱狂の中で下部からの組織化によって「愉快な軍隊」を作りだした。「大衆は進んでそれぞれの分隊長や小隊長の決然たる指揮を要求した。『特別警備隊』略して『特警』に選ばれることを若い坑夫たちは至上の名誉と考えるのだった」。この「わたしたちの『赤軍』」「人民軍」の組織に当たってモデルとなったのは、ソ連の赤軍でも中国の八路軍でもなかった。「あきらかにそれは敗戦以前の日本帝国主義軍隊であり、戦中派の体験がその支えとなっていた」 [同・28]

坑夫たちは、「階級的には雑軍ともいえる部落解放同盟の戦闘性に脱帽し」「彼らを『解放軍』と略称したのも、この間の事情からみると、ゆえなきことではない」 [同・30]。

「私はなにも軍隊というイメージに固執しているのではない。ただ、労働者階級が戦後の労働運動の経験主義的秩序からはみだして、自律的にのがエネルギーを噴出させたとき、そのアナーキーな流動をいちおう包括しうるシステムは、彼等の記憶と理念のなかに存在する軍隊でしかなかったということを指摘したいのである」 [同・30]

しかし、この軍隊も既成左翼の桎梏を完全には逃れていなかった。このことを無念の思いで、谷川は次のように記している。「しかもなお、7月20日のあっせん受諾か否かをめぐって、この軍隊は指導部の白痴をよそおった戦線放棄を糾弾する一声もあげえなかった。それはこの軍隊の頭部がなお労組の体系 [「疑似市民的指導」] に包みこまれていたからである」 [同・30]。

にもかかわらず、谷川は三池闘争は安保闘争の水準を凌駕していたと主張する。それは「三池闘争がとにもかくにも熱っぽい否定のエネルギーをもって擬制疑似市民主義の星をひとたびのりこえ」「コンミュン風の共和精神に裏打ちされながら、無政府的にエネルギーをあふれさせた」[同・31]からである。それに対し安保闘争は、中間層の否定的ムードを乗り越えることがなく、フランス革命のような**32「純粹市民主義」が、一時期支配的になるかに見えながらも、結局は一度もそうはならなかった[同・34~5]。

谷川がブントをどう評価していたかは、必ずしも明言していないが、革共同と並んで共産党と同質の「パルタイ」であって（「パルタイの多数派に対するパルタイの少数派」[同・11~2]）、「反パルタイ・反イデオロギーとしてあらわれてくる大衆の自立運動」[同・40]をむしろ抑制する勢力というネガティブな評価をしていたように思われる。

また、安保闘争直後、「挫折」という言葉が学生たちに流行したとき、「お前の挫折が挫折なら、ちょうちょうとんぼも鳥のうち」とからかった**33。大学時代、戦死がほぼ確実な戦場に送られる日を目前にしながら過ごした谷川にすれば、当然の心情であったろう。

ところでこの小論で谷川は、ニヒルという言葉のアナーキーという言葉をししばしば対比させて使っている。例えば、「労働者のニヒリズムとアナーキズム」とか[同・35]、「一人の人間はイデオログとして存在するとともに行動者として存在する。イデオログとしての彼のエネルギーはニヒルに、行動者としてはアナーキーに噴出する」[同・40]といった具合にある。その意味を確定するのは難しいが、ブントの（さらにはマルローの）行動的ニヒリズムと同質のものであると考えられる。

大正炭鉱争議の中の「大正行動隊」

地方大手といわれた大正炭鉱（組合員二千人）の争議は、三池、安保後の労働運動の明白な退潮期に展開された運動であり、そのことは（少なくとも谷川にあっては）充分自覚されてい

*32*谷川はこれをフランスを名指しせず、「上昇期のヨーロッパ資本主義がうみだした意識」と呼んでいる[34]。

*33*鶴見俊輔「印象記」『谷川雁の仕事』付録。なお、谷川による60年代初頭の学生運動への辛辣な批評は、「カッコ付き学生論」1961にも見られる。

た。当時同じ九州で八幡製鉄で数万人の下請労働者が解雇されたのに、ただ一つの争議も起こらなかったという事実もあった**34。谷川の言葉を借りれば、「日本の大産業プロレタリアの上層部分が、戦争中に吸いこんだエネルギーの『本源的蓄積』は戦後運動のバネにはなった。しかし、それは安保三池闘争の中で大体使い尽くされて」しまっていたのである [『仕事』548]。

先にも述べたように、三池の闘争は全労働者、とりわけ炭鉱労働者の意気を大いに鼓舞した。ところが三池の二万の自衛集団は、突然「音もなく崩れさった」。その苦い経験を総括すべく、谷川らは三池にピケ隊員として出かけていた若い坑夫たちを中心として60年8月11日、「三池をしめくくる夕」を開いた。自分の山元で数百発の爆竹をあげてやり場のない憤激を発散したのである [『無の造型』あとがき]。「しめくくるとは、三池の教訓にもとづく決意を固めることであった。やがて居住区毎にそれぞれ独立した青年行動隊が生まれ、断崖のふちに立たされることが眼にみえていた第二次合理化案発表を前にして、それは一つにまとまった。彼らはいった。『負けることは覚悟してやる。一生の方針をみつけだすためにやる。だから三池のような負け方はしない』」。それは「破局に瀕した炭鉱でのちいさな経験」となるだろう、と谷川は推測する。しかし、その経験の中からこそ、革命の主体が登場し、日本の前衛は再生を勝ち取ることができるという希望を彼は表明している**35。目前の「反対運動」や労働争議を長期的な革命主体の形成のための一里塚と位置づけるこうした論理は、当時の革命的左翼に共通する認識であった。最小の犠牲で三池の妥協に成功した太田薫総評議長であれば、前衛の再生へ向けた（知識人の）革命的経験の蓄積のために、炭鉱労働者を路頭に迷わせることは許されるのか、生身の労働者を革命の道具にしてもよいのか、とこうした姿勢を厳しく非難したのである。

ところで谷川は、日本の炭鉱が将来性のある「基幹産業」であるという共産党などが依然として表明していた立場を一笑に付していた。経営も窮地に追い込まれていることは、百も承知であったと思われる。（日本経済はレジャー・ブームである中で、である。）彼にとって、坑夫はプロレタリアの中核ではなく、その周辺であることにこそ意味があった。彼らは農村を追

34 「越境された労働運動」『日本読書新聞』1961・10・15日。

35 「前衛の不在をめぐる」『中央公論』1960・12月号。

われてきたものたちであり、「失業以上の失業」状態にあると彼は見ていた**36*。

* 谷川の認識からすれば、これは何も石炭から石油へという当時の産業政策上の転換がもたらしたのではなく、炭鉱という仕事そのものの性格に由来するものであった。事実、筑豊では、農民は坑夫を村八分的に扱い、坑夫自身も自らを下罪人と自称していた。太陽と空気の下での夜と昼という自然条件を奪われた職場は、恐怖に満ちた場所であり、進んで選ぶようなところでは決してなかった。しかし、それだけに「地の上じゃ喧嘩しとつても地の底に行きゃ、兄弟よりも親しいばい。教え合うて働く。そうしないと自分も死なんならん」という強い連帯が生まれる場所でもあった〔森崎・1974・3～11〕。そして事故で肉親を失った多数の坑夫がいたこともあって、「地上の常民との共同体をもちえぬ地下労働者となった人々の、新しい『神生み』」とともに、宗教的共同体としても成立していたのである〔同・351〕。

それ故に、勝ち目のない闘争だという諦観がそこにはあった。敗残と滅びの美学のようなものが谷川の運動に漂うのはそのためであろう*。ちなみに谷川はこの時点で、レーニンの闘争がスターリニズムへと転落していったのはなぜであったのか検討が必要だが、自分にはその知識が甚だ貧弱だと正直に告白している〔同・74〕。運動を指導しながらも、島成郎ブント書記長と同様、自らの革命のヴィジョンの欠如についての不安を抱えていたのである。

* この点は、マルローの『希望』を想起させる。同書には「団結 solidarite」「友愛 fraternite」〔Malraux, 1996, 12, 33, 173〕という言葉が繰り返し登場するが、一種の諦観と滅びの美学に貫かれている。例えば次の一節がその典型である。「バクーニンの思想を知ってはいても、革命は、ビュイグの目には、つねに農民一揆 une jacquerie にすぎなかった。希望のない世界に面と向かって、彼がアナーキズムの世界から期待するものは、〔後世の人の〕手本となる叛乱でしかなかった。・ ・ ・彼は、ソヴェトの寿命がパリ・コンミューンの寿命より24時間長続きした日、レーニンが雪の上で踊ったという話を思い出した」〔ibid, 23〕。「もしおれたちがこ

36 藤田省三との対談「黙示録の響き」『思想の科学』1963・1月号。

こやマドリッドで敗けても・・・人々は、たとえ一日でも、心ゆくまで生きたんだ。
・・・とにかく、彼らは自由じゃないか！ 今まで自由だったことは一度もなかった
じゃないか。俺は政治的自由なんてことを言ってるんじゃないんだぜ。・・・分かる
だろ」[ibid, 172]。「彼らは友愛に酔っている。その友愛が長くつづかないだ
ろうことを知っていながらね。彼らは幾日かのあいだ、興奮の数日、でなければ復讐
の数日を満喫してから死んでゆく覚悟をしている。それぞれの夢によって生きた後で
ね」[ibid, 179]**37.

しかし、この作品には同時にこうしたニヒリズムとは一線を画した深いヒューマニ
ズムが読み取れる。ちなみにマルローの同志愛は、基本的に男の友情である。戦場
における戦友愛だからである。「勇気」と「勇気ある自己犠牲」に象徴される「男性
性」「英雄的行為」が高い評価を受ける[ibid, 185]。ヘミングウェイが同じスペ
イン内戦を描きながら男女の熱烈な恋愛をテーマとしたのとは対照的である。谷川
も森崎との愛については、全くといってよいほど語っていない。そして、マルローも
谷川も女性を語るときはほとんどの場合、母性とやさしさについてである。

さて、以下この第二次大正炭鉱争議とそこにおける谷川らの大正行動隊の運動を見てみよう
**38.

谷川らが第二次大正炭鉱争議にかかわるようになったのは、「九州サークル」の事務局が置かれて
いたのが、北九州市の隣、中間市という筑豊炭田地区の中心であったという事情による。三池
闘争の前後には、大正炭鉱をはじめ各地の各炭坑でも合理化攻勢が始まっていた。かくて「サ
ークル村」を休刊し、その中心メンバーは第二次大正反合理化闘争に移行していったことは既
に述べた。

旧「サークル村」の主要メンバーは、大正炭坑組合の青年部とは独立に大正炭坑行動隊
（「大正行動隊」と略称）を結成した。1960年12月のことである。この十数名の行動隊員は、
大正炭坑3,500人の組合員に率先することを宣言した。そして多くの信奉者を得、「気持ちは

*37*以上の文章の翻訳には、小松清の訳（河出書房新社グリーン版世界文学全集・1961）を参
照した。

*38*大正炭鉱争議の経緯は、『無の造型』所収の「大正炭業闘争日記」を参照のこと。

おれも行動隊，という者が多く生まれた．行動隊はそれらをも行動隊員と呼んだ．会議への参加も行動への参加もオープンであった」．行動隊長には，杉原茂雄が選ばれた．彼に対する信頼感は「直線的で，組合員や家族らは彼を潔白の代名詞のように呼んだ．私的な権力欲のない若々しさが，彼を中心とする二十代の行動隊員に貫徹していた．加入する隊員らは共産党とは縁のない，そして組合運動とも無縁であったものが多かった」[森崎・1970・135，141]．闘争の長期化で争議から脱落する者が続出する中，彼らは闘争の最後まで組織に留まり，志気を鼓舞する役割を演じ続けた．隊の中核となったのは，かつての共産党細胞が主力となって数名で組織された共産主義同志会（1960年8月5日結成）であった．

隊の方針には「一切の多数決原理に反対」が採用された．「従って，九十七人の行動隊員が欠席して三人の人間だけが出席した会議でも，大正行動隊の旗は三人の方に立つ．そこに大正行動隊の方針がある」とした．しかも，方針に反対の者は会議に出席してはならない，としたのである [『仕事』 550] ．

さて，当時大正炭鉱は経営が行き詰まり，60年春には給料遅払い，希望退職者募集が行われ，秋には賃下げと合理化案の提示が行われて，闘争が長期化していた．61年8月にはメインバンクの福岡銀行は大正炭鉱への融資を停止し，給料の支給が止まってしまった．森崎の筆によれば，組合幹部は弱気であったが「三池の熱でうずいている労働者たちは，ホッパースタイルで市中を歩きまわり，もはや企業の命運もろとも闘争へうちこむより方法がないではないかというような気運が流れていた．その高揚している気運の組織化を谷川が大正炭坑の同志らと積極的にとりくみだしたのである」[1970・129] ．組合幹部の意思を無視してである．そしてこの時期会社側が提示した合理化案に全面的に反対した．ところが，日本共産党はこの合理化案をのめと指令し，これを拒否した大正行動隊に所属する党員を党から除名する措置に出た．

争議が続く中，経営陣は経営責任を放棄して辞任してしまい，後を引き受ける者がいないという事態になっていく．「山元では福銀攻撃を決定した．そこへ中央の炭労指導者がとんできて，威圧的に同方針を撤回させた．政策転換闘争の一環として [政府に対し福銀と] 共闘すべしという要請である．炭労は三池闘争以後激化してきた政府のエネルギー変革政策に対して，企業固有の労使関係を土台とした山元闘争への集中は敗北につながるとの見地から，政治的に石炭政策と闘う『あらたな形態』であるところの政策転換闘争を打ち出していた．・・・同政転闘争における基本的要求は，（一）雇用と生活の安定，（二）石炭産業の安定的発展，（三）離職者の完全救済，（四）産炭地経済の振興と住民の福祉，の四点であった．大正炭鉱の闘争もこの基本的要求に汲み込まれて闘われる，というわけである．同調せずんば闘争資金

を打ち切るということになる。山元では激論の末、前決定を撤回した」[森崎・1970・153]。
社民路線への転換の承認であった。

これに対し、行動隊は戦術会議を開き、ストライキ決行を決定した。そして組合本部前に座り込んだが、座り込み参加者は8名に過ぎなかった[同・153~4]。

ところが、佐藤栄作通産相のあっせんにもかかわらず、経営の立て直しは順調にいかず、62年になっても賃金未払いが続いた。そこで山元の闘争委員会は炭労の反対を無視して「全員退職・閉山に追い込む」という戦術を立てた。そして、2月には2,000人の全労組員が一斉にストに入り、社長宅と福岡銀行に大規模な攻撃を開始することとした[同・200~1]。

この頃から全学連の学生(社会学同、マル学同)が次々と支援に詰めかけた。また、行動隊も上京して学生らと日本銀行や福岡銀行東京支店にデモをかけ、抗議文を読み上げた。

この頃の闘争現場は、「負けてもともとだ、とことんやれ、という雰囲気」が定着しつつあった。それは悲愴さというよりも、居座ったものの快活さ、ふてぶてしさであった。ユーモラスな放言とドスをのんでいる傍若無人さが表裏一体となっていた。・・・それら一種の開放祭的気風のなかへ、60年安保後下降的方向を持ちだしていた学生たちがはいつてきてその数を増した。組合員らは『全学連さん』あるいは、『おい、全学連』と呼んで迎え入れた。炭住みに泊まったり、谷川らがカンパで建てた『手をつなぐ家』に泊まったりした」[森崎・1970・204]*。

* ブント・全学連が当時四分五裂となって内部抗争を続けていたことなど、炭坑労働者には無縁の話であったわけである。

1962年5月、会社側と炭労中央の交渉による妥結案は、労働者にとって極めて厳しいものであった。しかし、長期の賃金の不払い(と倒産の危機)で追いつめられた労働者は、この案を受け入れるかどうかで激論の末、ついに勢力がほぼ半々となって、分裂するに至る。妥結案拒否のグループは、全員退職で闘う方針を決めたのである。行動隊員はこのグループの中心となった。炭労はこの分裂を前に、「残留者には[企業]再建の責任をもち、退職者には退職金獲得で協力する」と表明した。

6月19日の「締切前に続々と退職願はとどけられた。そして遂に退職希望者は千七十一名に達した。残留者は八百十二名である。この残留者の殆どは中高年令層であった*。これでは会社再建案の千五百人・四万八千トン出炭体制は根底からくずれ去ったことになる。会社は幹部

を総動員して、これはと思う者の慰留工作に奔走した。そして結局、今次退職者数八百六十四、残留者千十九名ということで落ち着いた」[森崎・1970・214]。再建案は再検討を迫られましたが、再建の目処はついた。それは退職戦術の敗北を意味していたのである。

*これは若年層のラディカリズムの反映でもあるが、彼らには再就職という逃げ道があったことも否定できない。事実その後の展開はそのとおりとなった。高度経済成長を背景に関西地域への転職が進んだのである。

そこで、退職グループは、800名を組織して大正鉱業退職者同盟を結成し、退職金闘争を展開することになった。谷川が顧問に、学生一人が常任書記となった[『仕事』591~5]。退職者に有利な条件を獲得するまで、会社側による仮処分の執行に対抗してピケや坑内立て籠もり(「坑底座り込み」)によって生産再開を阻止する方針にでた。「戦闘的第三組合」戦術である**39。福岡地労委は、同盟を労働組合と認定したのである。谷川雁をはじめ、行動隊のメンバーや学生たちもこの実力行使の先頭に立った。しかしこうした後ろ向きの闘争が中長期的展望をもつことは難しい。大正労組が残留者の生活が脅かされるばかりでなく、反対派が「このままでは山・街がつぶれる」とアピールしたのも当然である。九炭労も退職者同盟と実力で対決する姿勢を示した。他方、炭労中央は政府を動かして(退職金を妥結案どおりに支払おうとしない)会社側に圧力をかけ、退職金の早期完全支払を働きかけた。社長は資金繰りに苦しんでいたこともあるが、これは「革命運動だ」として炭鉱産業のためにもと強気の姿勢を崩さなかった。

争議が長引くにつれ、退職者同盟では同盟費月200円の滞納も出始めた。また若手で転職可能な者は、個別に転職先を見つけて同盟在籍のまま社宅を出て他県に就職していった。その数は同盟員の半数にものぼった。同盟の役員、委員長、事務局長も他県に就職し、他の委員も関西方面に多数就職した[同・265]。杉原茂雄が委員長となって踏みとどまっていたのは、市会議員として当選できていたからでもあった。同盟の存続そのものに疑問がでてきたのも当然であろう。

1963年、第三次斡旋案が出て、退職金の支払が一步進んだ段階で、退職者同盟は、筑豊企業

39 「越境された労働運動」『日本読書新聞』1961・10・15日。

組合という会社組織を作った。市からの予算を得て、退職者が入居する市営住宅の建設を請け負ったのである。また商店や理髪店もこの組合が建設した。そこには「同盟村を作り村のなかに生産と労働の場 [コミューン] を作らんとした」のである [森崎・1970・277, 279]。しかし、地方行政の一端を担ったばかりか、「金融資本」（銀行）からも融資を受け、地方ボスとも取引することに対し、戦闘的労働者が反発を抱いたことは当然であった。しかし企業組合の指導者たちは、「それなしに生活保護で食べている同盟員を救う道があるか」と反論し、反対をねじ伏せた。あるいは「同盟村を作るための住宅建設こそ闘いだ」と断言して沈黙させた。退職金の一部未払いのまま会社も閉山してしまった状況では、彼らの言い分を全く否定することはできなかった。

しかも、「退職者同盟の初代委員長は、紡績女工の周旋人となって帰ってきた。いままでの組織を手がかりに女工を集めて関西へ送り込んでいる。」企業組合の家の者の大半も「北九州へ下請け工となって拾い仕事に出ている」「大正行動の隊長は、閉山してもなお残る退職者らの退職金を獲得すべく、いま地元の自民党の選挙参謀」となった、という有り様となった [同・285~6]。

大正炭坑争議における敗北は決定的であった。ある炭坑労働者は、指導にあたった知識人たちに「きさまら、労働者を食いもんにしたじゃないか。ことばで労働者ばだまくらかしたじゃないか」と怒鳴り込んできたという [同・314]。谷川がこれにどう反論したのかの記録はない。

二年後の1965年、谷川は一切の執筆活動をやめた。そして上京して、語学教育テープを作る「ラボ教育センター」を創立、専務理事に就任した。43歳の年であった。しかし1975年頃まで、新左翼運動の中では、伝説の革命家、伝説の詩人として、沈黙する谷川への期待、憧憬は続いた。

その後1980年から谷川は執筆活動を再開した。しかしこのときには、読者は失われていたと言わざるを得ない。1995年死去。

むすび

大正行動隊は、労働者の側からの暴力（的抵抗）を正面から打ちだしたところに特徴がある。三池で萌芽的に現れたものを全面展開したものである。戦後民主主義の暴力否定の風潮を真

っ向から批判したのである。その点では無自覚に非暴力を守ったブントを超えていたといえよう。思想的には、そこに大正行動隊の提起した問題があった**40。良くも悪くも、この暴力の肯定が、60年代末の新左翼によって再生されるのである。しかし、注意を要するのは、大正行動隊には「明るさ」と反権力的暴力が結びついており、「面白い」体験であったと谷川が述べていることである**41。70年代の内ゲバのもつ暗さとは対照的なものであった。

しかし既に述べたように、谷川自身の執筆活動は1960年代半ばに突然中断され、十数年の沈黙が続いた。この中断の開始時期は新左翼の沈滞の始まりの時期に附合する。高度成長による大量消費社会の定着は、新左翼のラディカルな理念を（少なくとも一時的に）風化させたし、谷川の農村共同体再生の夢を打ち砕いたかのようであった。

ところが、大衆・マジョリティの間での共同体的連帯の解体が進行すると同時に、マイノリティ集団の間では、かえって共同体的アイデンティティの模索が始まっていた。在日朝鮮人・中国人、被差別部落民、障害者そして女性の運動が、しかも新左翼の中から、新左翼を批判しつつ登場してくるのである。そこでは、谷川のいう「辺境の民」の間の共同体が再生、あるいは誕生するという期待が実現していくかのようであった。この展開を追うことは、本小論の範囲を越えるが、谷川が先駆的に主張していたことが全くのアナクロニズムではなかったことを示している。ここに「戦闘性」と同時に「優しさ」があるのかどうか、また「周辺」の運動が「中心」の運動の起爆力になるかどうかは別としてもである。60年前後の周辺での一運動と70年代以降に展開されるマイノリティの多様な運動との連続、非連続の検討は今後の課題である。

他方、谷川のフェミニズム思想について言えば、争議や闘争で現れるいわば非日常的な情熱の中での連帯と同時に、谷川は、日常の抑圧の下での連帯をも、共同体、とりわけ部落民や娼婦や貧農の娘らの中に見ている。彼はそれを「やさしさ」や「愛」「協同のエロス」という言葉で表現している。

他方で谷川は、革命的フェミニズムとでもいうべき方向をも模索していたように思われる。女たちは「愛と革命を同義語にしたがっている。・・・[ところが男たちの一部は]愛情の

*40*この点を作家の中上健次は谷川との対談で、アルジェリアの作家、フランツ・ファノンに引照しながら指摘している [『無の造型』しおり]。

*41*同右。

問題が解決されるのは社会が変わってから、その次の段階なのだ。それまでは革命に役立つものが正しい愛なのだ」という。これに対し、谷川は、「世の中が変わるまで待てといったところで、変わったからかならず女たちの孤独が解けるという証明にはならない」と反論する。そして「誤解を恐れずにいえば、集団的な性愛がなければならない」と主張する。「むろん、それは乱婚のすすめというようなものではなく」である**42。

例えば彼は「性愛と革命の共存または相互作用ではなく、両者が同義語の反復となることを目標にしているのです」と書く**43。ただ、谷川は「エロス」「性愛」という言葉を、少なくとも散文においては（あたかも説明を意図的に避けるように）常に断片的な文章の中でしか用いず、その結果それによって何を表現しようとしていたかは捉えどころがない。

ところで前述のように、九州サークル研究会は『サークル村』の発行に派生して、森崎らが編集部となって女性交流誌『無名通信』を発刊した。「女性の意識の発掘作業を目標」にして、である。「みなさんのおしゃべりを文字にいたします。まだ書くことは苦手だけれど伝えたいこんなことがある、というときどうぞお知らせください。わたしたちは女から女へと代々何を伝えてきているのでしょうか。それは言葉になっているのでしょうか。それを思想へ引きだすことはできるでしょうか、という呼びかけで主として炭坑の女たちが集まり、それへ都市で働いている女たちのいくばくかが参加し、百余名で出発した。そのうち未婚者は二十余名であった」[森崎・1970・87]。

『無名通信』の「宣言」には次のような文章が並ぶ。「わたしたちは女にかぶせられている呼び名を返上します。無名にかえりたいのです。なぜなら、わたしたちはさまざまな名で呼ばれていますから。母・妻・主婦・婦人・娘・処女・・・と」

「いま、どういう形で女たちは組織を作っているでしょう。たとえば炭婦会を例にしますと、『ストです。わたしたちは労働者の妻です。夫の要求は妻も共にたたかいとるべきです。わたしたちの家庭のために』と呼びかけます。かつては家の中で一人一人がつかえていたオヤジ中心主義が、集団となって動いているのです」

「自分をとざしている殻を、わたしたちの手でやぶること。それは被害者が、権力に対して加害者になるときです。わたしたちは、偶然に知りあった仲間、日常生活のなかでこのことを

42 「女たちの新しい夜」『サークル村』1958・3月号。

43 「工作者の論理」『思想の科学』創刊号。

やる以外に場所はありません」[森崎・1970・89～9に引用] .

『無名通信』は1961年7月まで毎月発行された。各地に散在する「無名通信」グループは、「階層も多様にわたりそれから派生する家庭的・社会的問題も多くて、それら諸現象に抵抗しつつ女たちに共通している意識の原型をさぐりあてることがなかなか困難であった。わたしたちには、何か根源的な打ち出しができていない思いが強かった」[同・89～90] .

「無名通信」グループの会員たちは、「性の対関係をもくるみこんだ解放闘争集団の論理を欲しがって、それを森崎のもとへ持ちこんだ」。しかし森崎は明確な答を出せず、ついには「一人でこれまでの体験を考えたい」とグループを解散したい旨を宣言した。他のものたちは「あなたはひとりで考える力があるからそういうけど、わたしたちはどうしても交流の場がある」と反発したが、森崎は強引に解散してしまった[同・91～2] .

以上の部落差別、フェミニズム、セクシュアリティといった問題への谷川（と森崎）のポストモダンの関心の背景には、さらに一般的に谷川の「近代」に対する批判的視点が存在した。その原点は、明治日本の近代化への批判にあったといつてよい。

谷川が幼年時代、祖父の影響で西南戦争の敗残者に関心と共感とを抱いたことは先に述べた。1950年代末には、（熊本の地で10歳前後で神風連とそれに続く西南戦争の薩摩兵のそれぞれに悲愴な敗北を同情をもって身近に見守った）石光真清の手記『城下の人』を読み、この著者に自分の祖父を重ね合わせて、この書から強い衝撃を受けたという**44。そして、西南戦争を頂点とする初期の明治政府に対する一連の反逆はアナーキーなエネルギーの発露としての百姓一揆の伝統を引き継ぐべきものであって、明治体制に吸引されなかった民衆の情念を表現する可能性をもったもとして思想的に昇華されて解釈された（旧士族が農民を武装させ隊伍に加えていれば、日本の歴史は大きく変わったであろうというのが谷川の嘆きである）。この論理でいえば、明治維新は、裏切られた農民革命であったということになる。そして明治政府が（歪められた形ではあれ）近代化を推し進めたとすれば、明治初期の反乱は反近代であり、谷川の共感も同様に近代批判、反近代ということになる[中森・1983・39～40] . そしてこの議

44 「『城下の人』覚え書」『思想の科学』1959・6月号。なお、『城下の人』は一部分が1943年に公刊、その後1958～59年に龍星社から他の三つの手記とともに四部作として刊行された。現在は中公文庫として入手できる。

論は、谷川のもつ反近代性は北一輝などの反近代思想に通底するという結論に向かう**45。ただ筆者はここでは、そうした解釈以上に、谷川の反近代性がポストモダンの反近代性に近いという側面を強調しておきたい。

*45*松本健一が北一輝に強い関心を示し、評伝を書くに至ったことは、この一つの現れである。

参照文献

谷川には生前出版の四冊の評論集と一冊の補遺集とがある。本稿で引用した谷川の文章は、この五つの単行本に収録されたものについては、「定型の超克」を除いて、手元にあった版からのものである。その五冊とは、『原点が存在する』現代思潮社・1963（初版は弘文堂・1958）、『工作者宣言』中央公論社・1959（初版）、『戦闘への招待』現代思潮社・1969（初版は同・1961）、『影の越境をめぐって』現代思潮社・1963（初版）、『無（プラズマ）の造形 - - 60年代論草補遺』1984・潮出版社（初版）である。これらの単行本に収録されていない評論からの引用は、『谷川雁の仕事』『谷川雁の仕事』（ともに河出書房新社・1996）からである。しかし、書かれた時期を明示するため、注にオリジナル・タイトルを記した。なお谷川の単行本としては他に、『あんかるわ別号 谷川雁未公刊評論』、『谷川雁 ある工作者の死貌』（刊行者不明）があるとされるが筆者は見えていない。ところで谷川による評論は、オリジナルな思想を生まれのままの形で表現しようとして論理化が充分でないためか、「詩人」としての感覚的発想のためか、メタファーや論理の飛躍が多く、真意を読みとりにくい（この点はカミュに似ている）。松本健一は「谷川雁にあっては、言葉によって武装すること、つまり詩的なレトリックによって語ったほうがより説得力をもつのである。それを、思想的な文脈で語るうとすると、論理に無理が目立つようになり、説得的でなくなる」と述べている[松本・1997・24]。筆者も同感である。

天野正子・1997『フェミニズムのイズムを超えて 女たちの時代経験』岩波書店

石光真清・1978『城下の人』中央公論社（中公文庫）

加納実紀代編・2004『リブという<革命>』インパクト出版会

河野信子・1990「『サークル村』初期と私」（『女たち』所収）

小松清・1962「アンドレ・マルロー 人と作品」『世界文学全集33人間の条件・王道（マルロー）』新潮社

竹内好・1951・「毛澤東」猪木正道・竹内好・蠟山芳郎『スターリン・毛澤東・ネール』要書房

谷川雁・1960「定型の超克」谷川他『民主主義の神話 安保闘争の思想的総括』現代思潮社

- 『谷川雁の仕事』1996・河出書房新社（『仕事』と表記）
- 『谷川雁の仕事』1996・河出書房新社（『仕事』と表記）
- 中森美方・1983『谷川雁論』七月堂
- 平井陽一・2000『三池争議----戦後労働運動の分水嶺』ミネルヴァ書房
- 三菱長船社研編・1970『新左翼労働運動10年 三菱長崎造船社研の闘争』三一書房
- 森崎和江・1965『第三の性 はるかなるエロス』三一書房（三一新書）
- 森崎和江・1970『闘いとエロス』三一書房
- 森崎和江・1972「暗黒という光に向かって」『解放教育』4月号（全国解放教育研究会編
『解放の思想 双書・部落解放2』明治図書出版・1974所収）
- 森崎和江・1974『奈落の神々 - 炭坑労働精神史』大和書房
- 吉本隆明・1960「擬制の終焉」谷川他『民主主義の神話 安保闘争の思想的総括』現代思
潮社